



「翻訳できない世界のことば」を読んで

上原中学校 一年三組 栗原 ミレナ 光吾子

私のうちには二つの言葉があります。ペルー人の父の母国語スペイン語と日本人の母の日本語です。私はあまりスペイン語が得意ではなく、父はとても日本語を上手に話す(家の電話に父が出ても外国人と分かっていなかったと言われます)ので、うちでの会話はほぼ日本語です。それでも、時々父には理解出来ない単語もあって、母に通訳してもらったことがあります。そんな時、よく母が「何と言えよいのかなあ…」と困って、父と相談しながら、それぞれの意味を話し合ったりするのです。携帯の翻訳機能を使っても、結局は「たぶんこれだと思う。」ということになってしまいます。

そんなこともあって、この本の題名を見た時、私は「そうだよねえ」と心の中でつぶやいていました。母に本を見せると、母も「分かる?」と笑っていました。

案の定、本の中には日本語には直訳できない世界のことばがあふれているのですが、著者が外国人(どこの国の方かは不明)ということ、日本語の「わび、さび」や「こもれば」なども紹介されていました。「こもれば」は、これが世界では使われない表現なのかと驚くほど簡単なことばでしたが、「わび、さび」は、よく聞けけれど本当のところの意味は分からずにいたのだなあと思強にもなりました。仏教をルーツとする精神世界のことばで「生と死の自然のサイクルを受け入れ、不完全さの

中にある美を見出すこと」だそうです。半分日本人の私には難しすぎてあまりよく分かりません。全日本人の母に聞きましたが、「分かるような分からないような・・・」という答えでしたが、不完全な美を愛する日本人というのは、理解出来るとも言っていました。なんでも、欧米の人たちは完全に調和の取れた物に魅力を感じ、日本人はそうではないらしく、欧米での歴史的な建築物などではシンメトリー（左右対称）の物が多く、日本ではアシンメトリー（非対称）が多いということを教えてもらいました。

この本では、「わび、さび」のように、精神的な表現の単語がたくさん紹介されていました。「森の中で一人、自然と交流するときのゆったりとした孤独感」や、「宇宙的なスケールで、時が過ぎていくこと」というとても壮大なことばもありました。「森の中・・・」はドイツ語なので、自然豊かな風景がすぐに思い浮かびます。「宇宙的な・・・」はサンスクリット語で、さすが仏教のことばーと納得です。

他の種類で多かったのが、単位に関係することばです。マレー語の「ピサンザプラ」はバナナを食べる時の所要時間で、約二分とのこと。しかも、食べる人やバナナの種類によって違うという細かさです。フィンランド語の「ポロンクセマ」は、トナカイが休憩無しに疲れず移動出来る距離、約七・五km。アラビア語の「グルファ」は、片方の手の平にのせられるだけの水の量です。こちらも精神的なことば同様に、そのお国柄や地域性ということに深く関係しているように感じました。

実際、日本語でも季節に関係することばが豊富です。四季のある日

本では、それをどれだけの確に表現するかを競ってきたのかと思うほどです。「雨」ひとつをとっても、五月雨、梅雨、秋雨、時雨など、パソコン検索すると、私の知らない雨だらけでした。ちなみに父の国では、「雨」は雨でしかないようです。ほとんど雨の降らない地域なので、仕方ありません。面白いのは、同じスペイン語を話す国でも、単語によっては意味が微妙に違ったり、全く違うこともあるということです。元は同じ言語ですら習慣や環境が変わると意味が違ってくるのだから、全く違う言語であれば簡単に翻訳出来ない言葉があっても不思議ではありません。翻訳は面倒ですが、むしろそのおかげで相手の生活や歴史を知ることが出来ます。この本には〇〇語と書かれているだけだったので、その言葉が使われている地域を調べたり、家族に質問したりしながら読むと楽しさが倍増しました。

二〇〇四年に環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したケニア人のワンガリ・マータイさんは、来日した時に感銘を受けた「もつたいない」ということばと意味を世界に広めました。他の国には無かった概念、エゴに関する大切なことがこの一語で表現されていたからです。翻訳の努力をしないで放っておけば、いつまでたっても分かり合えないままです。遠く離れた国で育った父と母も、時間をかけて話し合っ分り合う努力をしているのだと思います。私も家族はもちろん、世界の人たちのことを翻訳が難しいことばからも知りたいと思いました。知らないなんて「もつたいない」ですから。



### 自分の「幸福」

原宿外苑中学校 二年C組 入江 涼香

「お父さんが言ってたよ。『どこにいて幸福と思うかは人それぞれ』だつて。お城だつて行ってみなくちゃ楽しいかどうか分からないし、うらやましくないんじゃない?」

これは、「天山の巫女ソニー黄金の燕」の主人公、ソニーの言葉だ。私はこの言葉に深く共感した。そして、考えこんでしまった。私の「幸福」はどこで感じてるのだろう、と。

私の父は今、仕事の都合でロンドンに住んでいる。そのため、今年の夏休みは家族でオランダ、フランスを旅行し、最後に父の家があるロンドンで過ごすことができた。そのことを友人に話すと、「うらやましい。」や「いいな。」そして「幸せだね・・・。」と言われた。海外に行ったことがない友人達にとつては、私の旅行は「幸せ」かもしれないが、私にとつては、「幸せ」だろうか。

確かに、今年の旅行は昨年行った国内旅行よりも充実していた。オランダではずっと行きたかったアンネ・フランクの家にも行けたし、フランスでは名物のガレットを食べられた。アンネの家は興味深く、ガレットは同じ店に二回行くほどおいしかった。今年の旅行は良い思い出になった。しかし、それが「幸福」かと聞かれれば、私は首をかしげざるを得ない。

もちろん、旅行は楽しかった。良い思い出にもなった。だが、旅行だけ

らといって自分が自宅から離れていた一秒一秒がすばらしかったのではない。例えば、旅行中はホテルにとまっていたため、部屋が掃除される午前から午後にかけては、ホテルの外に居る必要がある。観光が好きなら人にとっては午前から午後の長い時間を使つて多くの名所を回れるので、「幸福」だろう。だが、体力がなく、慣れない海外での生活をしてると疲れがたまりやすくなる私にとって、毎日多くの場所を歩き回るのは、「幸福」ではない。その方が疲れて体調を崩しやすくなるし、三日に一度は外に出ずに休める日がほしい。また、旅行中は自分の食べたいものが、食べたい時に、食べられるとは限らない。家では母に頼めば、たいはいは食べたいものが食べられる。だが旅行となると、外食ばかりでメニューに食べたいものがない時が多い。それは食べることが大好きな私にとって、非常につらいことだ。

このように、他人から見ればヨーロッパの国を二つも訪れることができる旅行は「幸福」かもしれないが、私にとってはそうではない。もちろん「不幸」でもないが、心の底から「幸福」と言えるわけではない。これが私がソニンの言葉に深く共感した理由である。

では、私の「幸福」はどこで、どのような時に感じるのか。ソニンの言葉を読んだ時から、自分の「幸福」について考えるようになった。

まず、自分の好きなことをしている時ではないかと思った。私は学校で友人と話すことが好きだ。休み時間は友人達の中の一人の机に集まり、ずっと話している。では、私が「幸福」を感じるのは学校で友人と話している時なのか？　そこまで考えてから、私は「幸福」とはそもそも何

か、分からなくなった。明鏡国語辞典をひいてみると、「幸福」とは「不平や不満がなく、心が満ち足りていること。」とあった。しかし、私は友人と話していて話が盛り上がりたらずい少し落ち込んでしまい、心が満ち足りているとはいえなくなる時がある。じっくり考えてみると、自分の「幸福」が何か、分からなくなってしまう。

どうすれば、自分の「幸福」を見つけれられるのか。そう考えながら、ソニンの物語を読み進めていった。すると、最後の場面でソニンは「彼女が十二歳まで暮らしていた山を下りて良かった。」「ここ(城)でずっと生きていくんだ。」と思っている。この場面でソニンは自分の「幸福」を感じているのだと思う。山を下りて家族と暮らし、突然出会ったイウォル王子のもとで働き、燕になったイウォル王子とその兄弟を助ける旅をするなどの経験を重ねて、やはり自分の「幸福」は城でイウォル王子に仕えることだったのだと知ったのだ。だから、私は自分の「幸福」を見付けるには、様々なことを経験し、その経験から自分が「幸福」と感じたものは何だったかを考えることが必要だと思う。今はまだ幼くて、経験したことよりもしていないことが多いので分からないが、もしかしたら私は子育てをすることを「幸福」と思うかもしれない。あるいは全く別のことを「幸福」だと感じるかもしれない。

自分の「幸福」を見つげるために、私は興味のあることだけでなく、ないことにも挑戦したい。そして、その経験を参考にして自分の「幸福」が何かを考え、ソニンのように自分自身の「幸福」を見つげたい。



きみの友だちを読んで

広尾中学校 三年二組 土江 瞭奈

大切な人、と聞かれてあなたが一番最初に思いうかべるのは誰ですか？ 家族、先生、恋人……。答えはたくさんあるけど、やっぱり多くの人が思い浮かべるのは「友達」ではないでしょうか。今回私が選んだ本はそんな友達がテーマです。登場人物達の様々な悩みやいらだち、喜びなどを通して、友達の本当の意味を考えさせられる話でした。

この本の中には、とてもよく出てくる物語の鍵となる言葉があります。それは「みんな」という言葉です。皆さんも経験はありませんか？ ほしいものや、言いたいことがあっても、皆と違う意見だったら、皆の意見にあわせたり、自分の考えを言えなかったことは一度二度はあるのではないのでしょうか。そんなみんなといたため事故にあい、片足が不自由になってしまった少女「恵美ちゃん」の言葉の中で、私の印象に深くこつた言葉が2つあります。自分の体験とも重なる所があっているいろいろなところに気付かされました。

一つ目は「私はみんなを信じない」という言葉です。恵美ちゃんは事故をさかいに、クラスのだれともつきあわなくなります。彼女が事故のことで責めたてたのはたった数人だけだったはずなのに、みんなを敵に回してしまう……。すごく怖いし、集団の力は悪い方向に働いてしまうと本当にこわいな、と思いました。何があるかと、1人を皆で無視したりばかにしたりするのは間違っています。しかし自分がもしみんなの中

の一人だとしたら。あなたは「やめなよ。」と声をあげることはできませんか？

私が小学生の時、大縄大会で一人だけうまく跳べない子がいました。いつもいいところまでいくのに、その子のせいでだめになってしまうことも何度かあり、その子の順番がきたとき聞こえるようにため息をついたり、笑ったりしていました。あの時は跳べないほうが悪い、からかわれるのはあたりまえだと思っていたし、「とべないから笑われる」とその子自身にも言ったことがあります。しかし一番大きかったのは、「みんなが言ってるんだから正しい」というのが本当の理由だったと、過去をふり返つてみて思います。あの時、もうちょっと練習しようと言えたら。どうやったらうまく跳べるようになるか話し合えたら。誰も傷付かない方法があつたかもしれない。その子にはあやまつたし、なんとなく仲直りもしたけど、もつといい形での解決があつたのだと思います。自分の意見を言うにはすごく緊張するし、とても勇気のいることです。みんなに合わせて、思っていないことを口にするのはとても楽な逃げ道だと思います。でも、いつか絶対後悔する日がきます。私も何度もああしておけば……と思いました。集団の中で「自分」をもつことは結局は自分のためになるのだということを、恵美ちゃんの言葉で思い出すことができました。

二つ目に印象に残ったのは、恵美ちゃんが病気がちで体の弱い、恵美ちゃんのたった一人の友達である由香ちゃんへ向けた言葉です。「いなくなっても一生忘れない友達が、一人、いればいい。一生忘れたくない

から、たくさん思い出、ほしい。だから…『みんな』につきあつてる暇なんてない。」

私は人からの目を気にしてしまいます。一人しか友達のいないさみしい人だと思われたくないからできるだけたくさんの人と友達になつて、それなりに楽しくすごせればそれでいいと思っていました。でも、私には中学に入ってからできたかけがえのない友達があります。皆とは仲がいいし、話したりもするけれど、やっぱりその子が一番仲良しです。由香ちゃんみたいに残された時間がすくないわけではないけれど、学校で一緒にいられる時間は限られています。残された時間の中で、回りの目を気にして自分を偽るのではなく、本当に大切な友達との時間を大切にしていこうと思いました。

この本を読んで友だちの大切さ、自分の大切さを改めて知ることができました。「みんな」はとてもこわくなるし、気をつけなければならぬこと、めんどくさいこともあるでしょう。でも「自分」の意思をはっきりともち、「友達」を大切にする心があればどんな困難も乗りこえることができます。そしてもう一つ、大切なことを私は学びました。それは「自分の人生の主演は自分である」ということです。この本では一人の決まった主演はいません。登場人物達それぞれにスポットライトがあてられています。自分の物語をつくるのは自分だけです。私はこれからも大切な友達や、みんなと一緒に、自分の物語をつくっていききたいです。